平成二十五年六月十日発行
皇學館論叢第四十六巻第三号　抜刷

万葉集の「こけ」と中国文学

――「奥山の岩に苔むし」を中心に――

孫　静　冉

皇學館論叢　第四十六巻第三号
平成二十五年六月十日

万葉集の「こけ」と中国文学

――「奥山の岩に苔むし」を中心に――

孫　静冉

□ 要　旨

『万葉集』の歌と中国文学との関わりについて古くから多くのことが指摘されている。歌集で、植物の「こけ」が登場する歌は十二首である。本稿は「奥山の岩に苔生し」という表現に着目し、「こけ」の表記と意味を確認したうえで、蘚苔類の「こけ」の歌と中国文学との繋がりを検討してみた。「神聖、清浄な地に生える植物、聖域の指標」という、漢籍で定着していた「こけ」のイメージに上代人が注目し、受容されていた可能性が考えられる。また、「「こけ」と怨」、「「こけ」を詠む歌」という二つの章を設け、歌と漢詩文の影響や関係について、更なる解明に努めた。

□ キーワード

万葉集　こけ　漢籍　神聖　怨

一　問題の提起

『万葉集』巻六・九六二番には次のような歌が見える。

天平二年庚午　勅遣二擢駿馬使大伴道足宿祢一時歌一首[1]

A①　奥山之（オクヤマの）　磐尓蘿生（イハニこけむし）　恐毛（カシコモ）　問賜鴨（トヒタマフカモ）　念不レ堪国（オモヒアへナクニ）　（六・九六二）

（奥山の　岩に苔生し　恐くも　問ひたまふかも　思ひあへなくに）

左注に「右、勅使大伴道足宿祢饗二于帥家一。此日、会集衆諸相二誘駅使葛井連広成一、言レ須レ作二歌詞一。登時広成応レ声、即吟二此歌一。」とあるように、これは天平二年、駿馬を選ぶための勅使、大伴道足の到来を歓迎した宴で、駅使の葛井連広成が歌を作れという求めに応じて、即座に作ったものである。大伴道足は当時（天平二年）、正四位下の高位を以て擢駿馬使として大宰府に来たのであり、大いに歓迎されたわけである。その歓迎の場で、当時六位の卑官である葛井連広成は、「会集諸衆」の歌詠の要請を「恐くも　問ひたまふかも」と述べ、この「歌らしい歌など思いつかない（思ひあへなくに）」歌を作ったのである。

此の歌と同じ上二句を有する歌として、巻七・一三三四番に、

A②　奥山之（オクヤマの）　於レ石蘿生（イハニこけむし）　恐常（カシコケど）　思情乎（オモフこころヲ）　何如裳勢武（イカニカモせム）　（七・一三三四）

（奥山の　岩に苔生し　恐けど　思ふ心を　いかにかもせむ）

という歌がある。巻七の譬喩歌に収められている「寄レ山」五首（一三三一―一三三五）の中の一首である。作者不明の歌ではあるが、諸注釈書が指摘するごとく、高い身分の女と関係を結んでいる男の、女に訴えた形の歌であるとい

うことが確認できる。一三三一番の歌「磐畳　恐山常　知管毛　吾者恋香　同等不レ有尓」と同じく、身分の違いをわきまえつつも、その相手に惹かれる心を詠んだものである。

右の二首について、上二句の「奥山の岩に苔むし」を下句の「カシコシ」を引き起こす序とする指摘は、諸注釈書においてほぼ一致している。[2] ただし、上二句には、それぞれ「奥山」、「岩」、（岩に生えた）「こけ」という三つの景物が登場するが、下句の「カシコシ」というイメージを喚起したものとして、たとえば新編全集『萬葉集』[3]の九六二番の頭注が「奥山の岩に苔生―第三句の「カシコシ」を起こす序。霊地の奇岩・巨石を神聖視することは古代信仰の一つの形態」と述べるように、従来、「苔」よりも「奥山」或いは「奥山の岩」のほうにかかわっているというふうに指摘されることが多い。そうした中にあって、窪田空穂『萬葉集評釋』は一三三四番の語釈に、「「奥山の石」は、上代では神聖を感じてゐた物であるのに、それに苔が生えると、一段と神さびるので、恐れあるの意で「恐」と續け、その序詞としたもの」と説明しており、近年、影山尚之氏[4]が、「奥山」と「高山」に焦点を当てた論考で、A組の九六二番と一三三四番の歌について、「「苔」むした「岩」が「カシコシ」を引きだしているところから明白なように、「奥山」で人目につかず存在しているそれが畏怖されるべき神聖なものとしてうたう」と、「カシコシ」を引き出すのが苔むした岩と「苔」に論及するのは貴重である。

「カシコシ」という言葉の意味について、『時代別国語大辞典』（上代編）では、

㋐　恐ろしい。㋑　恐れ多い。㋒　驚くべきである。ただごとではない。

という三つの項目に分け解釈されている。A組の二首の場合は、ともに尊い人に対する気持ちで「カシコシ」が用いられており、㋑の意味の「恐れ多い、畏敬」と解すべきであると判断される。たしかに、歌人の言いたいことが歌の後半の部分に置かれ、「カシコシ」の使用は人事にまつわっているとはいえ、この「カシコシ」を導くきっかけとな

るのは、上二句に描かれた景物にあるということも言うまでもなく注目しなければならない。そして、「恐ろしい」の意ではなく、「恐れ多い、畏敬」の意で使用されている「カシコシ」を喚起する景物としては、恐ろしい存在ではなく、神聖な、高貴な存在にあると捉えられる。(5)

既に真下厚氏(6)は、奥山に生える真木、しきみ、菅などの呪木、聖木的な意味の植物を究明したうえで、「「奥山」は人里を遠く離れた山中の異界―神世界であった」と結論づけており、「奥山」の空間としての神聖さを認めている。

一方、同じく「奥山の岩」に生える或る植物を意識しつつ作られた歌は、当該二首のほかに集中次の三例が見られる。

B① 奥山之(オクヤマノ) 磐本菅乎(イハモトスゲヲ) 根深目手(ネフカメテ) 結之情(ムスビシコヽロ) 忘不得裳(ワスレカネツモ) (三・三九七)

(奥山の 岩本菅を 根深めて 結びし心 忘れかねつも)

B② 奥山之(オクヤマノ) 磐影尓生流(イハカゲニオフル) 菅根乃(スガノネノ) 懃吾毛(ネモコロワレモ) 不二相念一有哉(アヒオモハザレヤ) (四・七九一)

(奥山の 岩陰に生ふる 菅の根の ねもころ我も 相思はざれや)

B③ 奥山之(オクヤマノ) 石本菅乃(イハモトスゲノ) 根深毛(ネフカモ) 所レ思鴨(オモホルカモ) 吾念妻者(アガオモヒヅマハ) (十一・二七六一)

(奥山の 岩本菅の 根深くも 思ほゆるかも 我が思ひ妻は)

ほぼ同じ構造の上二句（いずれも「奥山の岩」＋植物）を持つA組の歌とB組の歌を比較してみると、次の表のようなことが明らかになる。

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
	位置づけられる場所	植物	関わる下句の内容
A	奥山の岩（A①、A②）	こけ（蘿、苔）	カシコシ
B	奥山の岩陰（B②） 奥山の岩本（B①、B③）	菅	根深めて結びしこころ ねもころ、根深シ

先に新編全集の頭注で見たように、A組の二首の歌を見る限りでは、確かにⅠとⅢのイメージの導入に或る必然的な関連性が存在しているかもしれないと思われる。

しかし、B組の三例について、諸注釈書によると、当該の三首はいずれも、そこに位置づける「菅」の縁で、下の「根深めて結びしこころ」、「ねもころ」、「根深シ」[7]にかかっているということも明らかである。A組と同じく「奥山の岩（岩本、岩陰）」に位置づけられるが、そこに生えた植物（Ⅱ）の違いによって、A組と全然違うイメージが導入されている。言わば、Ⅰを共有するA組とB組は、異なるⅡを持っているが故に、結局異なるⅢが引き起こされてくると言えよう。

B組のパターンに従って顧みると、A組における「カシコシ」の導入は、必ず「奥山の岩」と無縁であるとはいえないが、そこに登場する植物「こけ」とのなんらかの相関性も考えるべきである。本稿ではA組の歌に登場する「こけ」のイメージ、とくに漢籍における「苔」の用例と意味との関わりを中心にして考察してみたいと思う。

二　「こけ」の表記について

万葉集において、植物の「こけ」が登場する歌は、詞書も含め、A①とA②のほか、集中次のような十例が見られる。

①従二吉野一折二取蘿生松柯一遣時　額田王奉入歌一首[8]

三吉野乃　玉松之枝者　波思吉香聞　君之御言乎　持而加欲波久　（二・一一三）

②妹之名者　千代尓将レ流　姫嶋之　子松之末尓　蘿生万代尓　（二・二二八）

③何時間毛　神左備祁留鹿　香山之　鉾榲之本尓　蓐生左右二　（三・二五九）

④詠レ蘿

三芳野之　青根我峯之　蘿席　誰将レ織　経緯無二　（七・一一二〇）

⑤安太部去　小為手乃山之　真木葉毛　久不レ見者　蘿生尓家里　（七・一二一四）

⑥敷細布　枕人　事問哉　其枕　苔生負為　（十一・二五一六）

⑦結紐　解日遠　敷細　吾木枕　蘿生来　（十一・二六三〇）

⑧吾妹子　不レ相久　馬下乃　阿倍橘乃　蘿生左右　（十一・二七五〇）

⑨…帯為　明日香河之　水尾速　生多米難　石枕　蘿生左右二…　（十三・三二二七）

⑩神名備能　三諸之山丹　隠蔵杉　思将レ過哉　蘿生左右　（十三・三二二八）

いずれも仮名書きではなく、それぞれ「蘿」、「蓐」、「苔」という字をもって表記している。そのうち、「蘿」という表記を使った例が最も多く、計十例ある。この三つの文字を中国の古辞書で確認すると、次のごとくになる。

「蘿」については、『説文解字』(9)に、

蘿　莪也　従艸　羅聲魯何切

とある。また『爾雅・釋草』には、「蘿」が検出されないが、「莪」については、

莪　蘿　今莪蒿也

とあるように、「蘿」は「莪」をいうもので、「莪」と同じく蒿属の植物である。

「苔」は『説文解字』によると、

苔　水衣　従艸　治聲徒哀切

とあり、『爾雅』によると、

蕈　石衣　水苔也　一名石髪

とあるように、「苔」は今の蘚苔類の苔と同じように、水中或いは石の上に生える植物である。

「薜」については、『説文解字』には、

薜　牡蕡也　従艸　辟聲蒲計切

とあり、「薜」は牡蕡である。更に『爾雅』において、「薜」は「白蘄」、「山蘄」、「庾草」、「山麻」、「牡蕡」などいろいろな植物に解釈されているが、蘚苔類の「苔」についての説明は見られない。

右に見るように、中国では、「蘿」と「薜」は、「苔」と相違して、それぞれ別の植物を指していることがわかる。

一方、『倭名類聚抄』(巻十・苔類百廿二)に「蘿」を調べると、

蘿　唐韵云、蘿、魯何反、日本紀私記云、蘿、比加介

とある。また『類聚名義抄』には、

蘿　音羅ヒカケ　コケ

とあるように、「蘿」は『倭名類聚抄』の苔類に収められており、「比加介」、「ヒカケ」という和名があるとともに、「コケ」とも訓んでいる。

また、『類聚名義抄』で「蓐」と「苔」を調べると、

蓐　補草反　音鎞　―荔　香草　コケ　クルシフ　チハフ

苔　音臺　コケノリ　ミノリ　ミル

とあり、それぞれ「コケ」の訓みが見られる。

また、『時代別国語大辞典』（上代編）における「こけ」の解釈は次のごとくである。

こけ［苔・蘿］（名）㋐こけ。蘚苔類。陰地や湿地の地表を蔽ったり、古い樹上や石上に生育する。（中略）㋑さるおがせ。地衣類の一種の糸状地衣とよばれる植物で、深山の樹枝に生ずることが多く、網もしくは糸屑のような形で垂れ下がる。

つまり、上代では、「こけ」は蘚苔類、普通の苔を指す場合もあれば、樹枝などに生える「さるおがせ」を指す場合もある。A組の二首を含んだ十二首の歌に出ているそれぞれの「こけ」の定義については、従来の注釈書で揺れが見られるが、管見の限りでは、大体次のように要約できる。[10]

(1)蘚苔類の苔を表すもの（A①、A②、③④⑥⑦）

(2)さるおがせ、地衣類の植物を表すもの（①②⑤）

(3)諸注釈書で直接触れていない、意味が確定できないもの（⑧⑨⑩）

右に示すように、「さるおがせ」の意味として(2)に収められている三例は、樹（松、槙）、樹枝など、その生育場所

はいずれも樹に関する所に限定されていることがわかる。[11] それに対して、「こけ」を蘚苔類の「苔」の意味で使われている例は、十二首中、六例を占めていることが目立つ。(1)の分類には、ともに「蘿」、「薜」、「苔」という漢字表記が見られ、中国においてそれぞれ違う植物を示している「蘿」、「薜」、「苔」という三つの漢字が、万葉集においては、共に「コケ」の訓みをもっており、同じ蘚苔類の「苔」と認識されていたことが推定される。[12]

以下、集中(1)の分類、蘚苔類の「こけ」の歌を見ていくことにする。

三　A組歌の「こけ」と漢籍

すでに第一節で検討したように、「奥山の岩」、「こけ」と「カシコシ」の喚起については、ただ「奥山の岩→カシコシ」という直線的な繋がりではなく、「こけ」の選択が欠如すれば、その喚起関係も成立できないといえよう。また、「奥山の岩にこけ生し」という表現に即しながら、もっと範囲を広めて調べてみると、万葉集に、キーワードの「奥山」が詠み込まれている歌は次の十六例が挙げられる。

ア奥山之　菅葉凌　零雪乃　消者将レ惜　雨莫零行年　（三・二九九）
イ久堅之　天原従　生来　神之命　奥山乃　賢木之枝尓　白香付　木綿取付而…　（三・三七九）
ウ奥山之　磐本菅乎　根深目手　結之情　忘不得裳　（三・三九七）（B①）
エ奥山之　磐影尓生流　菅根乃　勤吾毛　不二相念一有哉　（四・七九一）（B②）
オ奥山之　磐尓蘿生　恐毛　問賜鴨　念不レ堪國　（六・九六二）（A①）
カ奥山之　真木葉凌　零雪乃　零者雖レ益　地尓落目八方　（六・一〇一〇）

キ奥山之　於レ石蘿生　恐常　思情乎　何如裳勢武　（七・一三三四）（A②）
ク吾瀬子尓　吾恋良久者　奥山之　馬酔花之　今盛有　（十・一九〇三）
ケ奥山尓　住云男鹿之　初夜不レ去　妻問芽子乃　散久惜裳　（十・二〇九八）
コ奥山之　真木乃板戸乎　押開　思恵也出来根　後者何将レ為　（十一・二五一九）
サ奥山之　真木乃板戸乎　音速見　妹之当乃　霜上尓宿奴　（十一・二六一六）
シ奥山之　木葉隠而　行水乃　音聞従　常不レ所レ忘　（十一・二七一一）
ス奥山之　石本菅乃　根深毛　所レ思鴨　吾念妻者　（十一・二七六一）（B③）
セ於久夜麻能　真木乃伊多度乎　等杼登之弖　和我比良可武尓　伊利伎弖奈左祢　（十四・三四六七）
ソ奥山之　八峯乃海石榴　都婆良可尓　今日者久良佐祢　大夫之徒　（十九・四一五二）
タ於久夜麻能　之伎美我波奈能　奈能其等也　之久之久伎美尓　故非和多利奈無　（二十・四四七六）

「こけ」が出ているA組の二首（オ、キ）を除けば、「奥山」が歌の初句に位置して、序歌になるものは、ウ・エ・カ・シ・ス・ソ・タの七例があり、この七例の歌には、すべて「カシコシ」が現れていない。この点からいうと、また「奥山→カシコシ」という直線的な喚起関係も成立しがたい[13]と思われる。

そうであるなら、「奥山の岩にこけ生し」と「カシコシ」の喚起関係において、欠かせない重要な役割を担っている「こけ」については、更に検討を進める必要があると思う。

A組の九六二番と一三三四番の二首に「蘿」と記されるが、日本にあっては「蘿」字も蘚苔類の「苔」の意に解せることを先に見た。

「苔」について、『藝文類聚』[14]に収録されている「苔」の項をみると、次のように記述されている。

（前略）風土記曰、石髪、水衣也、青緑色、皆生於石。　遊名山志曰、石簣○太平御覽一千作簀、按據御覽四十七引賀循會稽記、当作簀。山、緑崖而上、高百許丈、裏悉青苔、無別草木。

（『藝文類聚』巻第八十二　草部下　苔）

また、晋の崔豹の名物考証『古今注』において、「苔、蘚。空空無人行、生苔。或紫或青、一名員蘚、一名緑銭、一名緑蘚。」というような記述があるように、古代中国には、苔は水の中、石の上、高山、ひいては、人跡まれなところに生える植物として認識されていた。そして、苔はその生育の形態によって、「石衣」「石髪」「緑銭」などという別称が付けられている一方、その色によって呼ばれた「青苔」「紫苔」などの言葉もよく漢籍の中に見られる。まず、次の二首を見てみよう。

1伏波未能鑿。樓船不敢開。百年積流水。千歳生青苔。
行行詎半景。余馬以長懐。南方天炎火。魂兮可歸来。

（梁　江淹　「渡泉嶠出諸山之頂」『四部叢刊正編　江文通集』巻第三）[15]

2東南嶠外爰有九石之山。乃紅塵十里。青崿百仞。苔滑臨水。石險帯渓。

（江淹　「赤虹賦并序」『四部叢刊正編　江文通集』巻第二）

右は南朝の代表的な詩人の一人である江淹の作品を取り上げている。1の最後の句は明らかに屈原の『招魂』における「魂兮帰来、南方不可以止些」の文に依拠したものである。詩のなかでは、長い年月がたって、青い苔の生えたところは霊魂が回帰すべき、神聖な地として描かれている。1と違って、2は「苔滑」、「石険」の二句からなる対句を用い、環境の険しさを語っている。同じ江淹の作品には、更に次のようなものが見られる。

3（前略）

網紫宙兮洽萬品。冠璇寓兮濟群生。

（中略）

苔蘚生兮繞石戸。蓮花舒兮繡池梁。

伊日月之寂寂。無人音與馬跡。

躭禪情於雲逕。守息心於端石。

永結意於鷲山。長憔悴而不惜。

（江淹　「雑三言五首并序搆象臺」『四部叢刊正編　江文通集』巻第十）

「鷲山」、即ち霊鷲山は釈尊がしばしば経典を説いたところで、きわめて神聖な地だとされている。詩人は仏教の修行のために、敬虔な心で自ら山の中で「象台」[16]を構築する。右の一首には、その場所の神聖さと清浄さの描写のために、「蓮」[17]とともに「苔」が用いられたと考えられる。

以上のように、漢籍に登場する「苔」は山の中など、人跡まれな、神聖な、尊いところに生えた植物として意識されつつ用いられたことがわかる。「苔」を神聖視した傾向は初唐の時代になると、更に明らかになってくる。初唐詩における「苔」について、沢崎久和氏は「王維詩「青苔」考」[18]で、「「青苔」が「有る」ことは、その地が聖域であることの指標なのである」と述べ、次の詩を挙げている。

4晩入應眞理。經行尚未回。房中無俗物。林下有青苔。

（宋之問　「題鑒上人房」『全唐詩』巻第五十三）[19]

詩の中の「青苔」は「俗物」と対立する存在として描かれている。「苔」が生えた鑒上人の住まう林下は俗世間と

隔絶された清浄な空間であることを語っている。更に、初唐詩には次のような詩が見える。

5真経知那是。仙骨定何爲。許邁心長切。嵇康命似奇。
桑疏金闕迥。苔重石梁危。照水然犀角。遊山費虎皮。
鴨桃聞已種。龍竹未經騎。爲向天仙道。棲遑君詎知。

（王績　「遊仙四首」之四『全唐詩』巻第三十七）

6錦里淹中館。岷山稷下亭。空梁無燕雀。古壁有丹青。
槐落猶疑市。苔深不辨銘。良哉二千石。江漢表遺靈。

（盧照鄰　「文翁講堂」『全唐詩』巻第四十二）

7香閣臨清漢。丹梯隠翠微。林篁天際密。人世谷中違。
苔石銜仙洞。蓮舟泊釣磯。山雲浮棟起。江雨入庭飛。
信美雖南國。嚴程限北歸。幽尋不可再。留步惜芳菲。

（宋之問　「使過襄陽登鳳林寺閣」『全唐詩』巻第五十三）

5は王績の「遊仙四首」即ち「過山観尋蘇道士不見題壁四首」の第四首で、前の三首とともに、詩人の憧れている幻の神仙世界が描かれている。6の「文翁講堂」は漢の教育家で、蜀の学問の礎を築いた一人だとされている文翁によって建てられた学舎である。この詩の「苔」も尊い清浄空間に生える植物である。7の「苔」は仏寺に生えるもので、「人世谷中違」、「幽尋不可再」と詠まれるように、登場する場はやはり俗世を離れた地に他ならない。以上に挙げてきた六朝と初唐詩に登場する「苔」の生育場所について整理すると、左のように要約できるだろう。

a　人跡到らぬ山の中（神々しさ、険しさ）

b　仙境

c　寺院、道観等（或いは修行に関わる場所）

「苔」は、人跡まれな神秘な地域（a）、憧憬である尊い神仙世界（b）、宗教的な清浄空間（c）という、人間の接近しにくい、俗塵を離れた所に生える景物として描かれてきた。同じ趣旨が、駱賓王の「賦得白雲抱幽石」、王績の「黄頰山」、楊炯の「和劉侍郎入隆唐観」など多数の初唐詩に見ることができるように、「苔」が持つこのようなイメージは、六朝と初唐詩人達に自覚されていたと言えよう。漢詩文には、和歌の「序詞」にあたる修辞法は見られないため、九六二番と一三三四番の歌のように、「奥山の岩に苔生し」の類型表現を持ち、「カシコシ」を導いている現象を、漢籍にはそのまま容易に見出すことができない。しかし、その登場によって起こされていた神々しさ、神聖さという「コケ」のイメージは、歌と漢詩文に共通していて留意される。

更に、『懐風藻』の中に次のような漢詩が見られる。[20]

石壁蘿衣猶自短。山扉松蓋埋然長。遨遊已得攀龍鳳。大隠何用覓仙場。

（藤原宇合「秋日於左僕射長王宅宴」）

結蘿為垂幕。枕石臥巖中。抽身離俗累。滌心守真空。

（釈道慈「初春在竹渓山寺於長王宅宴追致辞　并序」）

右の一首目の藤原宇合の漢詩は、長屋王の御宅を仙境に譬え描写するのに、石壁に生えた「蘿（衣）」[21]を用いている。後の一首は「俗累を離れ」た僧の住まうところを「蘿の幕」、「石の枕」がある清浄なところとして描いている。『懐風藻』に見られる以上の二首における「蘿」はそれぞれ中国詩における右のbとcと一致する。すでに漢詩に定着していた「苔」のこのイメージが上代の人達に受容されていた可能性が考えられ、その点、更に作者の藤原宇合と釈道

慈はともに渡唐経験のある者で、漢文の造詣が深いというところからも推測できるだろう。

九六二番の作者の葛井連広成は、『懐風藻』に詩二首、『経国集』に文二篇をのせて漢文学に造詣の深い一人である。このような作者は前に述べた漢詩文に定着していた「苔」のイメージを意識したうえで、それが生えたところの神聖さ、清浄さを想起しながら、「苔生し」を用い、下句の「カシコシ」（恐れ多い、畏敬心理）を引き起こさせた可能性が考えられる。

次に、A組の二首以外の歌における「こけ」の様子と漢籍との関わりについても触れておくことにする。

四　「こけ」と怨

「こけ」が登場する十二首のうちに、次のような二首がみられる。

C①　敷細布（シキタヘノ）　枕人（マクラヘヒト）　事問哉（ことトフヤ）　其枕（そのマクラニハ）　苔生負為（こけムシニタリ）　（十一・二五一六）

（しきたへの　枕は人に　言問へや　その枕には　苔生しにたり）

C②　結紐（ユヒヒモ）　解日遠（トカムヒトホミ）　敷細（シキタヘノ）　吾木枕（ワガこマクラハ）　蘿生来（こけムシニケリ）　（十一・二六三〇）

（結ひし紐　解かむ日遠み　しきたへの　我が木枕は　苔生しにけり）

C①は柿本人麻呂歌集に出ている問歌（二五一五番）に対する女の答歌である。枕に苔が生えるのはその枕を使う人が久しく来ないことを比喩的に云ったもので、「夫の疎遠にしていることを、枕に寄せて恨んだ意」である（『萬葉集評釋』）。C②は「枕に寄せた歌」三首においての第一首で、やはり「夫の疎遠を怨んで訴へた歌」（『萬葉集評釋』）とされており、「苔生し」は上の句の「結ひし紐　解かむ日遠み」と同じイメージで、久しく逢わないことを誇張し

て具象化したものと理解されている。

以上のC組の二首における「苔生し」について、その基本的イメージとそれに付随する感情を整理すると、左のようになる。

基本的意味	時間の経過　年月の久しいこと
付随する感情	疎遠になった夫（恋人）に対する怨み

苔が生えることによって、時間の久しいことを表し、ひいては疎遠になっている相手に怨みの情を訴える例は六朝の漢籍に多く見られる。

8柏梁新寵盛。長信昔恩傾。誰謂詩書巧。飜為歌舞輕。花月分牕進。苔草共階生。
憶涙衫前滿。單眠夢裏驚。可惜逢秋扇。何用合歡名。

（陳　陰鏗　「班婕妤詩」『藝文類聚』巻第三十　怨）

9潛玄宮兮幽以清。應門閉兮禁闈扃。華殿塵兮玉台階苔。中庭萋兮緑草生。
神眇眇兮密静處。君不御兮誰為榮。

（漢　班婕妤　「自傷賦」『藝文類聚』巻第三十　怨）

10但懼秋塵起。盛愛逐衰蓬。坐視青苔滿。臥對錦筵

（宋　鮑昭　「代京洛篇」『藝文類聚』巻第四十二　楽府）

11慙幽閨之琴瑟。晦高臺之流黄。春宮閟此青苔色。秋帳含茲明月光。夏簟清兮晝不暮。
冬釭凝兮夜何長。織錦曲兮泣已盡。迴文詩兮影獨傷。

（梁　江淹　「別賦」『文選』巻十六）

12君子従遠役。佳人守煢獨。離居幾何時。鑚燧忽改木。
房櫳無行迹。庭草萋以緑。青苔依空牆。蜘蛛網四屋。
感物多所懐。沈憂結心曲。

（晋　張景陽　「雑詩十首・一」『文選』巻第三十一）

8と9はいずれも『藝文類聚』の「怨」の項に収められており、階段に生えた苔が、思う相手が久しく訪れてこないことの象徴として、君主の寵愛を失った班婕妤[22]の悲哀の情を訴えている。後の10、11、12の三例も、思っている相手の訪れが少ない住宅に、陰湿な階段に生えた苔をもって、相手に疎遠にされていた女性の怨みの情を表現した例である。

『藝文類聚』には更に次のような詩が見られる。

13昔聞倡女別。蕩子無歸期。今似陳王歎。流風難重思。翠帶留餘結。苔階沒故基。
圖形更非是。夢見反成疑。燻鑪含好氣。庭樹吐華滋。香燒日有歇。花落無還時。

（梁　簡文帝　「傷美人詩」『藝文類聚』巻三十四　哀傷）

「紐を結んだきり、再び解いてくれる日が遠い」と「苔生し」の景をともに用い、久しく逢わないことを意味するのは、二六三〇番の歌と一致する。

二五一六番と二六三〇番の歌には、苔が生える場所として、漢籍の「階」や「庭」など、常套的な設定と違って、万葉集のこの二例は、いずれもその生える場所を「枕」としている。これは漢籍に見られない万葉歌人の独特な発想であると言えよう。それにしても、以上の例に見られるように、寵愛を失った、疎遠にされた女性の怨みを訴える漢

詩文には、「苔」がほぼ定着したイメージとしてよく用いられていた。この点は万葉集当該の二首と一致している。こうした漢詩文での女性の怨みと「こけ」の結びつきは、年月が久しく、疎遠になった夫（恋人）に対する怨みを「こけむし」という表現によって歌う万葉集の歌に受容されていたことを想定させるものである。

五　「蘿を詠む」歌

『万葉集』に「こけ」を題にした歌は次の一首がみられる。

詠レ蘿

D三芳野之（ミよシノの）　青根我峯之（アヲネガミネの）　蘿席（こけムシろ）　誰将レ織（タレカオリケム）　経緯無二（タテヌキナシニ）　（七・一一二〇）

（み吉野の　青根が峰の　苔席　誰か織りけむ　経緯なしに）

此の歌における「こけ」は「蘿」の表記であるが、それが蘚苔類の「苔」と同じものと認識されている。[23]

まず、その歌題に注目したいと思う。万葉集には、「詠――」を題にした歌は集中巻七の「雑歌」と巻十の「春雑歌」に収められており、他には巻三や巻九、巻十六等にも散見する。記紀歌謡に見られなかった万葉詠物歌における中国詩の影響は、つとに青木正兒氏や岡田正之氏、山岸徳平氏等の先学により指摘されてきた。[24] また中西進氏が「巻七・十の分類および短歌作家の詠物題短歌は、唐詩の傾向の中に自ら入っていると考えられる」[25]と述べる如く、それは配列順についての影響のみではなく、取材上の模倣の可能性も考えられるだろう。

万葉集において、「こけ」が詠物歌の主体として歌題にされた歌は、巻七の一一二〇番の歌以外に用例が見られないが、六朝や初唐詩には、苔を詩題にして詠まれた作品は、次のように多く挙げることはできる。

「青苔賦（并序）」　（梁　江淹）
「詠青苔」　（梁　沈約）
「新苔詩」　（梁　庾肩吾）
「青苔賦（并序）」　（初唐　王勃）

更に、『藝文類聚』や『初学記』、『太平御覧』において、それぞれ「苔」の項が設けられているということからもわかるように、六朝、初唐において、「苔」は詩人たちに愛賞された対象としてよく詠まれていたことが窺える。

以上述べてきたことから整理すると、巻七の一一二〇番の歌に、苔を歌題にしたことはただ偶然な所為ではなく、漢詩文からの影響も考えられると思う。

更に、一一二〇番のように、山の峰とともに、一面に生えた苔を織物に見立てた例は漢詩文には次のように見られる。

14百果珠爲實。羣峯錦作苔。懸蘿暗疑霧。瀑布響成雷。

（初唐　楊炯　「和劉侍郎入隆唐觀」『全唐詩』巻第五十）

15崖口衆山斷。嶔崟聳天壁。氣衝落日紅。影入春潭碧。
錦繢織苔蘚。丹青畫松石。水禽泛容與。巖花飛的皪。

（初唐　宋之問　「初至崖口」『全唐詩』巻第五十一）

『萬葉集全註釋』が「自然現象が、経緯の絲なしに織り出されるという思想は、漢文学の影響を受けているものだろう」と指摘するごとく、本節で検討した一一二〇番はまさにこのような受容の流れの中に位置づけて理解されるべきであろうと思われる。

六　結　び

以上、九六二番と一三三四番を中心に、万葉集における「こけ」の歌と漢籍におけるそれを考察してみた。六朝、初唐詩の中で、「こけ」には多様な意味が付与される。本稿ではこれまで例を挙げて、漢詩文における「こけ」の意味、及び特徴を次の二点に確認した。

㈠　神聖、清浄な地に生える植物、聖域の指標

㈡　時間の経過、年月の久しいことを表すものとして、疎遠にされた相手への怨みの情が付随される

㈡の用法は万葉集の「こけ」の歌（二五一六、二六三〇）の中にも明らかに見出すことができる。また、一一二〇番の歌の歌題や苔を織物に見立てたという詠み方にも漢籍の趣向が見られるように、六朝、初唐における「苔」のイメージに上代人が注目し、受容されていた可能性が考えられる。「奥山の岩に苔生し」と下句の「カシコシ」の喚起関係については、もともと神聖観念を伴う「奥山」と、新編全集における九六二番の歌の頭注に「霊地の奇岩、巨石を神聖視する」という指摘があるごとく、従来、多く「奥山の岩」に着目し解釈されてきた。それとともに、本稿で見てきたとおり、「カシコシ」の喚起関係は、歌における「こけ」との関係も十分考えられると思う。九六二番と一三三四番の歌の作者は、まさに「こけ」を「神聖、清浄な地に生える植物、聖域の指標」として意識しながら、「こけ」を用いていたのだと考えられる。また、『懐風藻』の藤原宇合と釈道慈の漢詩において、俗世を離れた僧侶の住宅と仙境の描写に「蘿」の使用が見られるのは、漢詩文によく見られる「こけ」の意味を上代人が学んだ傍証となろう。

注

（1）万葉集の引用は井手至、毛利正守校注の『新校注萬葉集』（和泉書院　平成二十年一〇月）を用いた。以下、『万葉集』の引用はこれに拠る。以下のA～Dの分類は筆者による。

（2）『萬葉童蒙抄』（『荷田全集3』吉川弘文館　昭和四年）は九六二番について、「おくやまのいはにこけおひ　下のかしこみといはん迄の序也」と述べたのをはじめとして、『萬葉集古義』などの諸注釈書にも「奥山の岩に苔むし」を下句の「カシコシ」を引き起こす序とする指摘が見られる。

（3）『新編日本古典文学全集7　萬葉集②』一三〇頁　（小学館　平成七年一〇月）

（4）影山尚之「「奥山」と「高山」と―万葉集のことば・ノート」（『園田国文』第十五号　平成六年三月）

（5）後述のとおり、A組における「奥山」、「奥山の岩」はいずれも神聖視されている。それ以外にも、「布士能嶺乎（フジのネヲ）　高見恐見（タカミカシコミ）」（三・三二一）、「滝上乃（タキのウヘの）　三船之山者（ミフネのヤマハ）（の霊威）　雖レ畏（カシコケど）」（六・九一四）、「天地之（アめツチの）　神乎曽禱（カみヲそイのル）　恐有等毛（カシコクアレど モ）」（六・九二〇）、「大王之（キミの）　命恐（ミことカシコミ）」（三・二九七を始めとして、計二十八例ある）など、神聖な、高貴な物事に対して、畏敬の気持ちを表わす「カシコシ」を受ける例は万葉集によく見られる。

（6）真下厚「万葉歌「奥山」考―その表現性をめぐって―」（『立命館文学』五〇五号　昭和六十三年三月）

（7）B①の三九七番について、『萬葉集全注』（西宮一民）には「上二句が第三句以下を導く譬喩的序としたもので、押シ伏スと結ブの二動作にかかるとみてよい」、「菅の縁で「根」と「結ぶ」と言ったもの」とある。

B②の七九一番について、上二句は「ねもごろ」にかかる序詞といった釈は諸注釈書に一致する。更に『萬葉集評釋』（窪田空穂）には「菅は山菅で、根の深いものである。この三句は、「根」を「懃」の「ね」に疊音でかける序詞」とある。

B③の二七六一番については、『萬葉集全注』（稲岡耕二）は「二句まで「根深く」を起こす比喩的序詞」、「「根深く」は岩の万葉集の「こけ」と中国文学（孫）

もとに生えている菅の根の深いように心の中に深くの意」といっているように、「菅」に着目していることがわかる。

(8) 一一三番は歌の部分ではなく、題詞の中に「蘿」が見られるが、いちおう挙げておく。

(9) 『説文解字』の引用は『説文解字注』(段玉裁注、藝文印書館、一九七六年一月)に拠った。また、以下で古辞書の引用はそれぞれ、『爾雅義疏』(上海古籍出版社、一九八七年十二月)、『類聚名義抄』(正宗敦夫校訂、風間書房、昭和四十五年)、諸本集成『倭名類聚抄』(京都大学文学部国語学国文学研究室編、臨川書店、昭和五十二年)である。

(10) 参考にした注釈書:『萬葉代匠記』、『萬葉集古義』、『萬葉集全釋』(鴻巣盛廣)、『萬葉集評釋』(金子元臣)、『萬葉集評釋』(窪田空穂)、『萬葉集全註釋』(武田祐吉)、『萬葉集注釋』(澤瀉久孝)、『萬葉集全注』(伊藤博、稲岡耕二、西宮一民他)、『萬葉集釋注』(伊藤博)

(11) ③の二五九番の「こけ」は、陰湿な「杉の本」にあることから、諸注釈書にはそれを「青苔」と見ることが多い。

(12) 蘚苔類の「こけ」の表記には、中国では違う植物を指す「蘿」と「薜」の字が見られる。これに類似していた用字法は、万葉集の「カツラ」の文字表記にも見られる:六三二番歌における「月内之楓」は、「月には桂の木がある」とされた古代中国の俗信(『初学記』月所引の「安天論」など)に拠った表現ではあるが、「桂」の用字のかわりに、漢籍で違う木を指す「楓」の字を用いていた。

(13) なお、用例は省略するが、「岩」を詠む歌をみても、「岩→カシコシ」という単線的な喚起関係も見出しがたいと言える。

(14) 『藝文類聚』の引用は上海古籍出版社(一九八二年一月)の版本に拠った。

(15) 『四部叢刊正編　江文通文集』台湾商務印書館(一九七九年十一月)

(16) 明萬暦二十六年刻本『江文通集注』注は「象」について、「達摩傳曰負荷大法者比之龍象」と述べる。「象」は仏法の譬え。

(17) 中国には、仏界を「蓮界」、仏寺を「蓮舎」、袈裟を「蓮服」と呼ばれたことがあるように、「蓮」は仏教の世界で極めて清浄、

神聖な存在だとされている。特に仏教が盛んであった六朝時代には、詩賦に登場する「蓮」は清浄、神聖な植物として描かれることは多い。

(18) 沢崎久和「王維詩「青苔」考」(『国語国文学』第三十号　福井大学国語国文学会　平成三年三月)

(19) 『全唐詩』　中華書局（一九九二年十月）

(20) 『懐風藻新註』林古渓著　パルトス社（平成八年一月）

(21) この藤原宇合の漢詩における「蘿」について、林古渓著の『懐風藻新註』では、これを「つた」と解釈している。一方、竹下豊氏は、「『堀河百首』の「苔」の題をめぐって」(『女子大文学国文篇』大阪女子大学紀要56　平成十七年）という論文のなかで、「「蘿衣」は、「苔衣」と同じく蘿を衣に見立てた表現と考えてよい」といって、この詩の「蘿衣」は日本の漢詩において「「苔」を衣に見立てた最も早い例」だと述べているように、「蘿」を「苔」として取り扱う見方もある。詩の中の「蘿」の生育場所は「石壁」ということから考えると、ここも「蘿」を「苔」に解したほうが妥当だと思われる。

(22) 班婕妤は漢の成帝の妃、婕妤は妃の称号の一つ。趙飛燕によって、君主の寵愛を奪われた班婕妤には、「自傷賦」、「搗素賦」、「怨歌行」（「団扇歌」）という三首の作品が残されている女詩人でもある。

(23) 一一二〇番の題詞における「蘿」について、『萬葉代匠記』は「苔ノ字ナト、ハ意少替レト、今〈ハ〉(未)〈モ〉(消)苔ト通セリ」といっている。これをはじめとして、一一二〇番の「蘿」は蘚苔類の「苔」に等しいという指摘は諸注釈書においてほぼ一致する。

(24) 青木正兒『支那文學藝術考』二五頁～二六頁（弘文堂書房　昭和十七年十二月）
岡田正之『近江奈良朝の漢文學』二六一頁～二六二頁（養德社　昭和二十一年十月）
山岸徳平「万葉集と上代詩」　『和歌文學研究　山岸徳平著作集Ⅱ』一頁～七頁（有精堂　昭和四十六年十一月）

(25) 中西進「詠物歌の位置」『万葉集の比較文学的研究』六四三頁　（桜楓社　昭和四十三年）
万葉集の「こけ」と中国文学（孫）

［附記］

本稿は平成二十四年一月九日、第三十五回萬葉語学文学研究会（於大阪府立大学）での発表を基にしたものです。発表の際に御指摘をいただきました内田賢徳氏、奥村和美氏、影山尚之氏に厚く御礼申し上げます。また、懇切なご指導を賜りました毛利正守先生をはじめ、大島信生先生、斎藤平先生に、深く感謝申し上げます。

（そん　せいぜん・皇學館大学大学院博士後期課程・常熟理工学院講師）